小学校英語教育における評価のあり方
― パフォーマンス評価のすすめ ―

達　川　奎　三[1]

Tips for the assessment of elementary school English
−Accumulating students' oral performance for course grading−

Keiso Tatsukawa

English education as a school subject at elementary school started in Japan in April 2020. Teachers have been trying very hard to provide good quality lessons to their students. They are now getting used to teaching English to students in class and students are getting better at using the target language, namely English. However, many teachers do not have clear ideas about how they should assess or evaluate students' learning and progress. The author suggests that teachers should provide as many oral performance tests as they can and accumulate the results for grading and for reports to parents. We should keep in mind when we design performance tasks: (1) students are young beginning learners, (2) they are learning a second/foreign language, and (3) evaluation should be encouraging. In practice, we should use as many visual materials as we can, which will make the tests more stimulating and attractive for young learners.

Key Words:
primary school English education, assessment, performance tests, visuals, formative evaluation
キーワード：
小学校英語教育、評価、パフォーマンス・テスト、ビジュアル、形成的な評価

所属：
[1]広島大学外国語教育研究センター・Institute for Foreign Language Research and Education, Hiroshima University

はじめに

2017年３月に告示された新小学校学習指導要領に基づき、2020年度より、３、４年生を対象に「外国語活動」を、５、６年生に対しては「外国語（英語）科」として、（多くの場合）英語を指導することとなった。多くの小学校教員、とりわけベテランと呼ばれる世代の先生方は、自分が英語を教科として教えることを想像していなかった方も多く、戸惑いや抵抗感があるのも事実であろう。日々の英語の指導をすることに精一杯で、評価にまでは手が回らないという声もよく耳にする。小論では、小学校英語教育における「評価のあり方」を考え、現場で奮闘されている先生方への支援の一助としたい。その際、学習者は小学校児童であるので、(1) 幼い初学者であること、(2) 外国語（あるいは第二言語）を学んでいるということ、そして、(3) 評価は常に次なる学習につながる意欲や動機を与えるものであること、などを忘れないようにしたい。

1　指導と評価の一体化

教育の営みは通常、「目標」→「指導」→「評価」という流れになる。ただ、評価は最後にく

るからと言って従属するものではないし、ましてや省いてよいものでもない。「backwash effects 波及効果」ということばもあるように、評価は指導や学習に大きな影響を与えるのである。指導と評価を一体化させることを心掛けたい。重みを増す評価の役割について田中（2005：2-3）は「評価が教育の営みすべてをコントロールしている。（中略）換言すると、教育目標の設定、指導のあり方すべてが評価を基軸として成立している」として以下のような構図になることが望ましいとしている[1]。

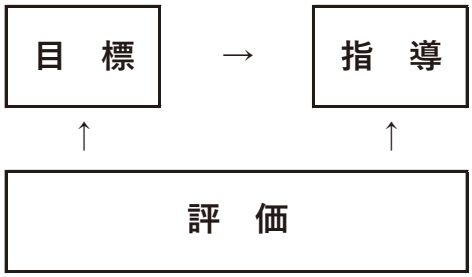


図１　今日的教育の認識のあり方

2　社会生活と視覚情報

学習者は小学校の児童であるので、テストの文脈をスムーズに理解させるためには、入力負荷の少ない視覚情報（絵、写真、動画などのビジュアル）を効果的に使うべきであると考える。言うまでもなく、我々人間は社会生活をしており、自分ひとりではなく、何らかの他者との関わりを常に持ちながら生活をしている。この他者との関わりを持つにあたって、コミュニケーションを円滑に行うことは極めて重要であり、そのコミュニケーションの手段として言語が重要な役割を果たしていることは誰もが認めるところである。外国語でのコミュニケーションも例外ではない。しかしながら、我々の社会生活の中で言語以外の要因も情報のやりとりにおいては大きな役割を果たしているのも事実である。例えば、Mehrabian（1971）はコミュニケーションの93%は非言語的（non-verbal）なものである[2]とし、ロボ他（1984：42-43）は言語による（verbal な）ものが30～35%であり、非言語的なものが65～70%であるとしている[3]。研究者によって非言語なものによる相互作用の総量割合の数字は異なるが、いずれも我々が言語以外の情報にも多大に依存しながら社会生活を送っていることを認めている。それ故、Wright（1989：137）は

When we try to understand someone speaking we normally take into account not only their verbal language but their appearance, the sound of their voice, their behaviour, their relationship to others, the situation and the setting. If we are reading we are affected to some extent by the appearance of the book or newspaper or greeting card. The non-verbal information helps us to predict what the text might be about, and this ability to predict helps us to recognize meaning more quickly than if we had to sort it out solely from what we hear or read.　（下線は筆者）

と述べ[4]、外国語教授においてもこの非言語情報をうまく活用して指導すべきだと主張している。

他方、北（1992：263）は我々が社会生活の中でどのような感覚を用いて情報を得ているかにという視点から、人間の五感を通じて情報を得る比率は「目83%、耳11%、手３%、口２%、鼻１%」である、という研究を紹介している[5]。

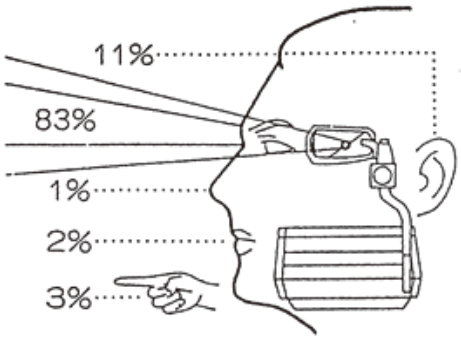


図２　五感で分けた情報入手量の比率

この数字は、加藤（1989：5）が『視覚障害者とスポーツ』という文献の中で述べている「視覚はすべての情報量の８割」[6]という数字ともほぼ一致する。

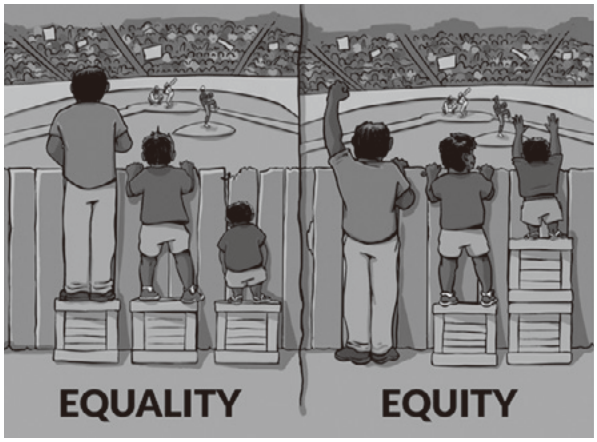
さらには、音声認知と視覚情報の関係性については、Nature 誌に掲載された McGurk & MacDonald（1976）がある。彼らの実験の詳細はここでは省略するが、私たちの言語認知は複数のモードを使って行われていることを報告し、これを the McGurk effect（または the

MacDonald-McGurk effect）と呼んだ[7]。言語認知における音声と映像（視覚情報）の相互関係を明らかにしており、大変興味深い。

これらのことをまとめてみると、我々は日常生活の中で視覚を通じて情報の多くを得ており、その視覚情報の中でも非言語によるものもかなり多いことが分かる。そして、このような社会生活の実態をしっかりと踏まえながら、外国語教育の教材開発や指導・評価をすることは大変重要である。それ故、視覚的情報とりわけ絵や写真などのビジュアルを効果的に活用したい。

3　ビジュアル使用による概念や情報の具体化

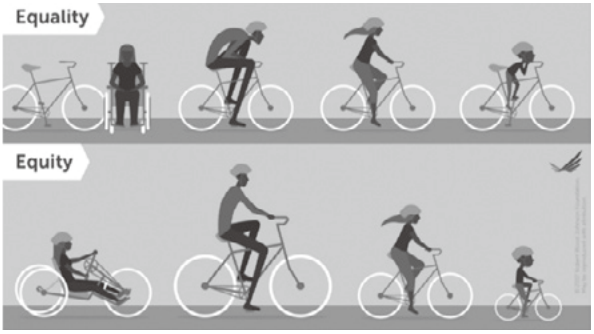
昨今、毎日のように耳にすることばにSDGsがあるが、ビジュアルをうまく使えば、抽象的な概念や情報を外国語でも理解・発信ができる。例えば、SDGsのGoal 10に「人と国の不平等をなくそう　Reduced Inequality」があるが、以下のようなイラストを使って「公平さ、公正さ（equality, equity）」を考えさせることも可能であろう。



Angus Maguire // Interaction Institute for Social Change
https://www.mentalfloss.com/article/625404/equity-vs-equality-what-is-the-difference

T: Look at the picture on the left.
Ss: Yes.
T: How many people can you see at the fence?
Ss: Three.
T: Can everybody watch the baseball game.
Ss: No.
T: Who cannot watch the game?
Ss: The small boy. He is (too) short.
T: Now, look at the picture on the right.
Ss: OK.
T: Can everybody watch the game?
Ss: Yes.
T: Why?
Ss: The man gave (gives) his box to the boy. (The boy has two boxes.) Now, he can watch the game.

また、次のようなビジュアルも応用編として使えるかもしれない。



(Drawn by Robert Wood Johnson Foundation)
https://www.rwjf.org/en/library/infographics/visualizing-health-equity.html

また、手元にある教科書を見てみると、以下のようなビジュアルも掲載しており[8]、人権への意識向上を目指す姿勢が伺える。

4　小学校外国語活動･外国語教育が目指す方向

具体的な小学校英語教育における評価のあり方を議論する前に、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』の記述[9]を少し整理してみたい。

4.1．小学校外国語活動・外国語教育の目標

まず、目標については、以下のように示されている。

外国語活動の目標（p.11）

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

（下線は筆者）

外国語科の目標（p.67）

第１　目　標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

（下線は筆者）

３・４年生を対象とした外国語活動では、聞くこと、話すことの音声を中心とした言語活動が中心であり、他方、５・６年生を対象とした外国語科では聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動、換言するならば、文字も取り入れた「四技能」の資質・能力の育成を目指すこととなっている。

新学習指導要領では、小学校中学年から外国語活動を導入し、「聞くこと」、「話すこと」を中心とした活動を通じて、外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」、「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視する、と解説されている（p.63）。

ただ、「文字」の導入・扱いについては、発達の段階に応じてとあるので、本稿ではあまり無理をせず音声による（口頭での）言語活動の学習成果の「評価」のあり方を考えてみることとする。

4.2．言語の使用場面と働き

言語の使用場面としては、次のような例が挙げられている。

(ア)　児童の身近な暮らしに関わる場面
　家庭での生活、学校での学習や活動、地域の行事など
(イ)　特有の表現がよく使われる場面
　挨拶、自己紹介、買物、食事、道案内、旅行など

中学校学習指導要領に示されている「電話での対応」や「手紙や電子メールのやり取り」などはなく、上記の言語の使用場面は児童にとってイメージしやすく、親しみやすい

他方、言語の働きの例としては、

(ア)　コミュニケーションを円滑にする
　挨拶をする、呼び掛ける、相づちを打つ、聞き直す、 繰り返す、など
(イ)　気持ちを伝える
　礼を言う、褒める、謝る、など
(ウ)　事実・情報を伝える
　説明する、報告する、発表する、など
(エ)　考えや意図を伝える
　申し出る、意見を言う、賛成する、承諾する、断る、など
(オ)　相手の行動を促す
　質問する、依頼する、命令する、など

が挙げられている。「苦情を言う」「反対する」「断る」「仮定する」などは中学校・高等学校では登場するが、これらの言語機能は語用論でいう face-threatening な発話であったり、抽象的な概念を表現せねばならず、児童には求めるべきではない。

4.3．児童に求める表現

小学校英語科では、第３学年及び第４学年において外国語活動を履修する際に取り扱った語を含む600～700 語程度を習得することが目標として示されているが、小学校段階では中学校段階で期待される「重文」「複文」は扱わず、「単文」及びそのつながりで十分であろう。具体的な文例としては、「資料１、２」に示したような表現を理解し、使えるようにすることを目指したい。本稿では「著作権の許諾」を得た *Here We Go ! 5, 6*（光村図書出版）の習得表

現[10]を示した。採択率は15.0％（令和２年度第２位）である（『内外教育』第6800号、時事通信社、2019）。

5　パフォーマンス評価をするにあっての基本方針

平成20年度に改訂された学習指導要領と今回の新学習指導要領とを比較してみると、いくつかの特徴的な変化がある。そのうちの一つは、記述の仕方が「教員が何を教えるか」という観点から、「児童が学んだことで何ができるようになるか」への変換である。この精神はCAN-DO形式の記述に窺える。

CAN-DOを意識した評価に関わって眞田（1995）[11]は、四半世紀以上も前に、中学校におけるオーラル・コミュニケーション・テストの開発を提案し、以下の３点を挙げている。

(1) 既習の範囲を扱うことによって、生徒が習ったことを生かせるようにする。
(2) あらかじめ段階（グレード）を決めておくことにより、テスト実施時の試験者（教員）の負担を軽減する。
(3) 初期段階では８割から９割以上の生徒がパスできる内容にする。

この提案は当時としては画期的であり、今日でも通用する考え方である。

これを下敷きにして、小学校の児童を対象とした評価の基本方針をまとめてみると次のようになるのではなかろうか。

(1) 既習の範囲を扱うことによって、児童が習ったことを生かせるようにする。
(2) あらかじめ診断項目を決めておくことにより、テスト実施時の教員の負担を軽減する。
(3) ほぼすべての児童がパスできる内容にする。

とりわけ３点目は、児童に多くの成功体験を積ませることを目指している。中学校入学前に「英語嫌い」になっている児童は絶対になくしたい。

さらに眞田（1995）はテスト設計ならびに実施における注意事項を５点ほど挙げているが、そのうちの３点は小学校児童を対象とした「評価」、とりわけ口頭での「パフォーマンス・テスト」にも生かすべきであると筆者は考える。

・一人ひとりに対して対話形式で行う
・視覚的手がかりを使用（ビジュアルの提示）する
・各項目の概念や話題の統一を図る

一つ目の項目については、確かに時間は要するが、他教員やALTの協力も得ながら是非とも実現したい。何故なら、「話す力」は「話す」ことを通してしか「テストの妥当性」は担保できないからである。

また、科目としての最終的な「評価」をする際には、次節以降で紹介するテストの記録を積み重ね、所期の目標が達成されつつあるか、あるいは軌道修正が必要であるか、などを判断するデータとしたい。つまり「形成的評価」を心掛けるということである。

6　パフォーマンス・テストの実際

これまでの議論を踏まえて、パフォーマンス・テストの実際を、学年ごとに示してみたい。なお、用いるビジュアルは紙（厚紙など）に張り付けても良いが、今日であればタブレットやPCを使った方が、機動力も増し（利便性が高まり）、時間的な節約にもつながるであろう。

6.1.　５年時でのパフォーマンス・テスト例①

３・４年時の「外国語活動」に加えて、５年時ではさまざまな英語の語彙に触れ、習得を目指すこととなる。「数字」「曜日」「色」「動物」「スポーツ」「職業」などである。ただ、あまり無理をせず、単語や単文の応答でも良しとし、成功体験をより多く積ませ、次の学習への動機付けにつなげるのが好ましい。例えば、「数字」の定着について、次のような確認作業をしても良いであろう。

T: Count the numbers in English from one to ten.
S: One, two, three, four, five, six, seven, eight, nine, ten.
T: Very good!

さらに、

T: Then, please read the number on the card.
　Let's start with this (one).

と言い、カードを見せて数字を言わせてみる。

11

児童の年齢を言うときに必要

12

児童の年齢を言うときに必要

20

以下20以上の２桁の数字

25

30

47

59

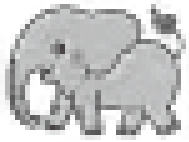
児童の実態に合わせて目標の数を設定し、学期ごとに取り組ませて、学習の進捗を感じさせると良いであろう。児童が99までの二桁の数字を言えることをまずは目標としたい。さらに「曜日」「色」なども同様に扱うことができよう。

次に、「動物」を例にとってみよう。

(1)

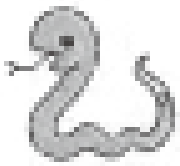
T: What is this ?
S: It is a cat.

(2)



T: What is this ?
S: It is an elephant.

(3)



T: What is this ?
S: It is a snake.

というようなやり取りができればまずは良いであろう。児童には「教科書125ページにある動物（下図参照）を15以上（20でも25でも良い）英語で言えるようになりましょう」と前もって目標を明示し、学習に取り組ませたい。テストの「波及効果」を期待することができる。

さらには、

T: Do you like cats?
S: Yes, I do. / No, I don't.

などの後続のやり取りを加えることも考えられる。

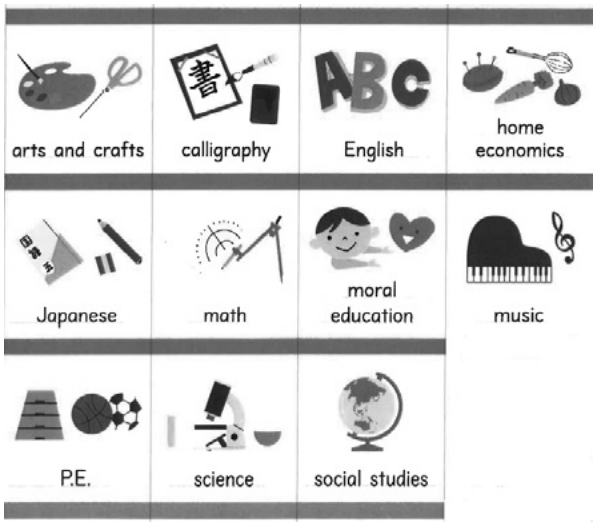
6.2.　５年時でのパフォーマンス・テスト例②

Unit ３では、

What subject do you like?
I like music and PE.

を学習することとなっている。「児童の身近な暮らしに関わる場面」とりわけ「学校での学習や活動」を扱い、児童にとってはイメージしやすい。以下のようなビジュアルを示し、「I like

music and PE.」などの発話を引き出したい。



さらには、

What do you have on Wednesday?
I have math and music on Wednesday.

という表現を習得することも期待されている。「What do you have on Wednesday?」の曜日の部分を入れ替えて複数回取り組ませて「形成的評価」をしたい。どれだけできたかやつまづきの記録を残しておき、同じような「パフォーマンス・テスト」を６年時でも行えば、自身の英語力の伸びを実感できる児童も多いであろう。

６.３．５年時でのパフォーマンス・テスト例③

Unit ６では、次のような表現を習うことになっている。

In Peru, you can visit Machu Picchu.

Where do you want to go?
I want to go to Italy.
Why?
I want to see soccer games there.

ただ、一足飛びにはこのような発話のやり取りを期待すべきではないので、まずはどれくらいの国が英語で、発音できるかを確かめたい。読者の皆さんが、英語ではなく「アラビア語」「ロシア語」「中国語」「ハングル」などで国名が言えるかを想像すれば、児童の味わう困難さを想像できるであろう。

実際のパフォーマンス・テストでは、

(1)
T: Where do you want to go?
S: I want to go to Australia.
T: Why?
S: I want to see koalas there.

(2)
T: Where do you want to go?
S: I want to go to Egypt.
T: Why?
S: I want to see pyramids there.

などと言えれば「概ね満足（B)」と評価すべきである。

６.４．５年時でのパフォーマンス・テスト例④

最後に言及したいのは「メニュー」「地図」などを用いて、実生活がイメージできるようなタスクである。Unit ７では次のような表現を学ぶこととなっている。

What would you like?
I'd like a hamburger and French fries.

How much is it?
It's 4 dollars.

この場合は食べ物や飲み物のメニューを使うこととなる。例えば、

MENU		
Food		(yen)
	Hamburger	250
	Cheese Hamburger	300
	Egg Sandwich	300
	Vegetable Sandwich	300
	Pizza	500
Drinks		
	Orange Juice	250
	Banana Juice	350
	Grape Juice	400
	Tea	250
	Coffee	300

を準備する。このメニューを見せながら、

T: What would you like?
S: I'd like an egg sandwich and orange juice.
T: How much is it (in total)?
S: It's 550 yen.

というやりとりができるようになりたい。このタスクは英語を読んで理解し、後半では「足し算」をし、その数字を英語で表現しなければならず、児童への要求度は高いと考えられる。

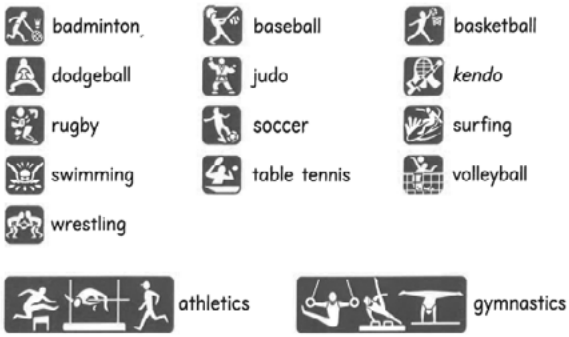
6.5. 6年時でのパフォーマンス・テスト例①

次に、6年生児童を対象としたパフォーマンス・テストを考えてみたい。Unit 3では次のような表現を学習することになっている。

Do you want to watch wrestling?
Yes, I do. / No, I don't.

What do you want to watch?
I want to watch surfing.

この場合も同様で、すぐ上で述べたように、まずはこれらのスポーツを英語で言えるように指導・評価を行いたい。



次に、「can」は多くの小学校英語教科書で5年時に導入されているので、絵を示しながら、

(1)

T: Do you like badminton?
S: Yes, I do. / No, I don't.
T: Can you play badminton?
S: Yes, I can. / No, I can't.

というやり取りを行う。また、

(2)

T: Do you like volleyball?
S: Yes, I do. / No, I don't.
T: Can you play volleyball?
S: Yes, I can. / No, I can't.
T: Are you in the volleyball club?
S. Yes, I am. / No, I'm not.

などと発展させてもよいだろう。

6.6. 6年時でのパフォーマンス・テスト例②

Unit 8では自身の将来の夢について述べる言語活動が用意されている。以下が理解し、発信できるようになりたい表現である。

What do you want to be?
I want to be an astronaut.

I want to be a robot creator.
Why?

I like robots.
I want to make many excellent robots.

この場合もまずは数多くの職業を英語で表現できるようになりたい。再度の確認となるが、読者の皆さんが「アラビア語」「ロシア語」「中国語」「ハングル」などでどれだけ職業名が言えるかを想像していただきたい。

例えば、この絵を示しながら、児童が職業を選ぶという設定で、次のようなやり取りができれば「十分満足（A）」あるいは「概ね満足（B）」という評価を与えてよい。

(1)
T: What do you want to be?
S: I want to be a vet.
T: Why?
S: I like animals. I want to save many animals.

(2)
T: What do you want to be?
S: I want to be a baseball player.
T: Why?
S: I like the Carp very much. I want to play in the stadium.

また、「あなたの将来の夢が次の職業だとします。その職業を英語で答え、理由を言ってみましょう」という指示を与えて、やりとりをしてみても良い。

(1)

a bus driver

T: What do you want to be?
S: I want to be a bus driver.
T: Why?
S: I like cars. I want to drive a big bus.

(2)

a chef

T: What do you want to be?
S: I want to be a chef.
T: Why?
S: I like cooking. I want to have my (own) restaurant.

このやりとりで、児童が合計３つのセンテンスを言えれば「十分満足（A）」あるいは「概ね満足（B）」と考えて良い。

６.７．６年時でのパフォーマンス・テスト例③

最後に「発表する」について考えてみたい。「話すこと」は「やりとり」と「発表」の２つの領域に分かれている。児童が取り組みやすいものとしては、いわゆる「Show and Tell」の活動をイメージすると良い。

Unit 9 では次のような表現を習うこととなっている。

My hero is Dan. He is my brother.

He is smart.
He can make a robot.

これらをもとに父親の写真を見せながら、

My hero is my uncle.
He is 45 (years old).
He is a sushi chef.
Many people like his sushi.

I want to be a sushi chef, too.

というぐらいの発表ができれば「十分満足（A）」を与えても良いだろう。何故ならば、児童は「一貫性 coherence」つまり内容的な繋がりを意識した５つのセンテンスの発話をしているからである。

おわりに（まとめ）

日本の学校現場では、とりわけ外国語教育（英語教育）では、「CAN-DO リスト」を作り、単元ごと、学期ごと、学年ごとに「学習者が学びを通して何ができるようになるか」をより具体的に記述しようとする取り組みがなされている。この思想性をきちんと具現化する一つの方法としては、言語教育（とりわけ外国語教育）においてはパフォーマンス・テストを用いた評価が馴染みやすいと考える。そのためには、時間と労力を要しても「一人ひとりに対して対話形式で行う」ことが大切（妥当性の担保）であり、初学者とも言える児童に対する口頭テストであるので、「視覚的手がかりを使用する（ビジュアルの提示する）」ことを取り入れたい。テストで得られたデータで「個人カルテ」を作れば学力の伸長が分かり易い。「個人カルテ」は紙媒体でも良いし、電子媒体でも良いであろう。児童の学習の伸びやつまずきを教員が共有できることが肝要である。また、説明責任が求められる昨今では、保護者への説明や回答する際に、より evidence-based な情報提供も可能となる。小論が現場で頑張られている先生方の一助になれば嬉しく思う。

【謝辞】

本稿を執筆するにあっては、光村図書出版株式会社より、著作権許諾の了承を得た。御理解に心より感謝を申し上げたい。なお、他社発行の検定済教科書にも紹介したい表現やビジュアルも多くあったが、著作権許諾を得るまでに時間的な余裕がなかったことを申し添えておく。

【引用文献】

田中正道（監修）野呂忠司，達川奎三，西本有逸（編）「評価の意義・役割」『これからの英語学力評価のあり方：英語教師支援のために』教育出版，2005，pp.2-3.

2）**Mehrabian, A.** *Silent Messages*. Belmont. CA: Wadsworth, 1971.

3）ロボ F，津田葵，楠瀬淳三『英語コミュニケーション論』スタンダード英語講座［6］大修館，1984，pp.42-43.

4）**Wright, A.** *Pictures for Language Learning*. Cambridge: Cambridge University Press, 1984. p.137.

5）北弘志（1992）「教育機器活用への教員研修」『コミュニケーション能力の育成と教育機器』（英語科教育実践講座９）ニチブン p.263.

6）加藤博志『視覚障害者とスポーツ』（改訂版）福祉図書出版，1989，p.5.

7）**McGurk, H., and MacDonald, J.** “Hearing Lips and Seeing Voices.” *Nature,* 264 (5588), 7, 1976, pp.746-748.

8）光村図書『*Here We Go! 5, 6*』（文部科学省検定済教科書），2020.

9）文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編 平成 29 年７月』開隆堂出版株式会社，2018.

10）光村図書『*Here We Go! 5, 6*』（文部科学省検定済教科書），2020.

11）眞田謙一郎「中学校におけるオーラル・コミュニケーション・テストに関する考察」中国地区英語教育学会研究紀要25，1995，pp.235-246.

【参考文献】

Anderson, A., and Lynch, T. *Listening*. Oxford: Oxford University Press, 1998.

Bransford. J.D. and Johnson, M.K. “Contextual Prerequisites for Understanding: Some Investigations of Comprehension and Recall.” *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 11, 1972, pp.717-726.

Brown, G. *Listening to Spoken Language* (Second Edition). New York: Longman, 1990.

Capper, S. “Nonverbal Communication and the Second Language Learner: Some Pedagogical Considerations.” *The language Teacher* 24

(5), 2000, pp.19-23.

Harris, T. "Listening With Your Eyes: The Importance of Speech-Related Gestures in the Language Classroom." *Foreign Language Annals* 36 (2), 2003, pp.180-187.

Mehrabian, A. *Silent Messages*. Belmont. CA: Wadsworth, 1971.

McDonough, J., and Shaw, C. *Materials and Methods in ELT* (Second Edition). Oxford: Blackwell, 2003.

Mueller, G. A. "Visual Contextual Cues and Listening Comprehension: An Experiment." *The Modern Language Journal* 3, 1980, pp.335-340.

Omaggio, A. C. "Pictures and Second Language Comprehension: Do They Help?" *Foreign Language Annals* 12, 1979, pp.107-116.

———. *Teaching English in Context*. Boston: Heinle & Heinle, 1986.

McGurk, H., and MacDonald, J. "Hearing Lips and Seeing Voices." *Nature,* 264 (5588), 7, 1976, pp.746-748.

Rixon, S. *Developing Listening Skills*. London: Macmillan, 1986.

Rost, M. *Listening in Language Learning*. London: Longman, 1990.

Underwood, M. *Teaching Listening*. London: Longman, 1989.

Ur, P. *Teaching Listening Comprehension*. Cambridge: Cambridge University Press, 1984.

Weir, C. J. *Understanding & Developing Language Tests*. New York: Prentice Hall, 1993.

Wright, A. *1000 Pictures for Teachers to Copy*. London: Nelson, 1984.

———. *Pictures for Language Learning*. Cambridge: Cambridge University Press, 1984.

Wright, A., and Haleem, S. *Visuals for the Language Classroom*. London: Longman, 1991.

Wright, D., and Wareham, G. "Mixing Sound and Vision: The Interaction of Auditory and Visual Information for Earwitnesses of a Crime Scene."*Legal and Criminological Psychology* 10 (1), 2005, pp.103-108.

池浦貞彦（1996）「リスニングでは何を、どう評価するか」『英語教育』７月号，pp.17-19.

宇佐美昇三（1987）「リスニング・テストの結果に及ぼす視覚的資料の影響について」上越教育大学研究紀要６（2），pp.85-95.

加藤博志『視覚障害者とスポーツ』（改訂版）福祉図書出版，1989.

北弘志「教育機器活用への教員研修」『コミュニケーション能力の育成と教育機器』（英語科教育実践講座９）ニチブン，1992.

木地泰治「視覚教材を用いた音声聞き取り学習が記憶保持に与える影響」『梅花女子大学文学部紀要』（英語・英米文学篇），1992，pp.221-36.

河野守男「人は音の流れをどのようにして理解するのか」小池（編）『英語のヒアリングとその指導』大修館，1993，pp.19-55.

眞田謙一郎「中学校におけるオーラル・コミュニケーション・テストに関する考察」中国地区英語教育学会研究紀要25，1995，pp.235-246.

眞田謙一郎，達川奎三『オーラル・コミュニケーションのテスト実例集』東教研研修報告No.122，東京書籍株式会社中国支社，1998.

達川奎三「外国語リスニングにおける話者映像提示の聴解促進効果」広島外国語教育研究13，pp.15-31.

田中正道『コミュニケーション志向の英語教材開発マニュアル』開隆堂，1991.

———（監修）野呂忠司，達川奎三，西本有逸（編）『これからの英語学力評価のあり方：英語教師支援のために』教育出版，2005.

光村図書『*Here We Go! 5, 6*』（文部科学省検定済教科書），2020.

文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編 平成29年７月』開隆堂出版株式会社，2018.

ロボＦ，津田葵，楠瀬淳三『英語コミュニケーション論』スタンダード英語講座［６］大修館，1984.

【資料１】出典：*Here We go! 5*（光村図書）

５年生で学習した表現

Unit 1

May name is Kazuki.

How do you spell it?

K-A-Z-U-K-I.

Do you like baseball?

Yes, I do. / No, I don't.
What sport do you like?
I like baseball.

Unit 2
When is your birthday?
My birthday is January 1 st.

What do you want for your birthday?
I want a new pencil.

Unit 3
What subject do you like?
I like music and PE.

What do you have on Wednesday?
I have math and music on Wednesday.

Unit 4
Do you wash the dishes?
I usually wash the dishes.

What time do you go to bed?
I usually go to bed at 11:00.

Unit 5
Can you play volleyball?
Yes, I can. / No, I can't.
I can play volleyball.

He can run fast.
She can do kendama.

Unit 6
In Peru, you can visit Machu Picchu.

Where do you want to go?
I want to go to Italy.
Why?
I want to see soccer games there.

Unit 7
What would you like?
I'd like a hamburger and French fries.

How much is it?
It's 4 dollars.

Unit 8
Where is my cap?
It's on the bench.

Where is Sakura Gym?
Go straight for one block.
Turn right on the first corner.

Unit 9
My hero is Dan. He is my brother.

He is smart.
He can make a robot.

【資料 2】出典：*Here We go! 6*（光村図書）

6年生で学習した表現
Unit 1
Where are you from?
I'm from Korea.

I'm good at ice hockey.

Unit 2
In spring, we have hanami.
You can enjoy beautiful cherry blossoms.

In summer, we have a summer festival.
You can enjoy dancing.

Unit 3
Do you want to watch wrestling?
Yes, I do. / No, I don't.

What do you want to watch?
I want to watch surfing.

Unit 4
What did you do in summer?
I went to Australia/
I enjoyed whale watching.

It was fun

Unit 5
I like music. I play the piano.

Who is this?

He is Takahashi Tomotaka.
He is a robot creator.
He is cool.

Unit 6
We have some beautiful beaches.

We have a Chinatown.
We can enjoy great Chinese food.

Unit 7
What's your best memory?
My best memory is our music festival.
I enjoyed playing the recorder with my classmate.

We went to Nikko.
We saw the "Sleeping Cat."
It was the small.

Unit 8
What do you want to be?
I want to be an astronaut.

I want to be a robot creator.
Why?
I like robots.
I want to make many excellent robots.

Unit 9
I want to join the brass band in junior high school.
I want to make many friends.